



# 【宮古街道】

岩手県

## 江戸の旅芸人も通った 五十集の道



### 江戸の極楽とんぼ

『筆満可勢』という記録が、東北大学に残されている。天保12年（1841）、今から170年ほど前に書かれた旅日記で、作者は富本繁太夫。江戸浄瑠璃の語り手で、風の吹くまま気の向くまま、面白おかしく人生を送った芸人で、借金取りに追われるように江戸を出立。船で石巻にたどり着き、古川、盛岡、遠野、宮古など、にぎわう町を語り歩いた。

各地で「豊後大塚」など、適当な芸名を語りながら、お金と女性の匂いのする所を目指して弟子と旅を続け、宮古から盛岡に戻るとき通ったのが宮古街道だった。この道について「戸川（閉伊川）の流れは強く、岩石厳しく草木茂り景色殊の外よろし」と記している。しかし、道中にまともな宿はなく、食べ物にも不自由なようだった。

繁太夫は盛岡に戻った後、久保田（秋田）、本荘、酒田、鶴岡、新潟を通り、京都、大阪まで行った。各地での滞在期間は事情によりまちまちだが、宮古の鉾ヶ崎には5カ月半も居住まいし、芸を見せるほか、遊女に稽古をつけたり、煮アワビやトシルというアワビの肝の塩辛を肴に酒を楽しんでいる。よほど居心地が良かったのだろう。



古街道と並行して流れる閉伊川



『筆満可勢』部分。宮古のウニや漁具を書き留めている。  
(東北大学付風図書館野文庫所蔵)

鞭牛和尚は宮古街道と三陸浜街道を中心に、多くの難所を手作業で切り拓き、橋を架けた。73年の生涯を終えるまで、宮古街道だけで10カ所以上の改良を行った。街道沿いには多くの碑が残されている。

### 災害復興に貢献

東日本大震災の大津波では、繁太夫が長逗留した宮古市鉾ヶ崎地区が壊滅し、宮古街道の一部も水に浸かるなど、宮古市周辺も甚大な被害にあった。明治時代などの津波記録を見ると、内陸から三陸



鞭牛和尚「道供養碑」。(宮古市墓目大平)

### 街道コラム

宮古街道と秋田街道を地域づくりに活用しているのが、NPO法人秋田岩手横軸連携交流会。今回紹介した富本繁太夫の旅日記を活用し、日本風景街道などに取り組んでいる。昔と今の記録を比較したマップを作ったり、街道探訪会を開催したりしている。



本町通には宮古の豪商の本店が並んでいた(宮古市)

海岸に支援物資が送られていて、宮古街道も使われたと想像できる。東日本大震災でも、国道106号は人移動や救援物資運搬の動脈となり、途中にある2カ所の道の駅も、支援拠点の一翼を担った。行きかう人々が苦勞して越えた山道は、被災地に未来の光明を届ける、希望の道でもあったのだ。

街道周辺の道の駅は、道の駅・区界高原（宮古市）、道の駅・やまびこ館（宮古市）、道の駅・みやこ（宮古市）、道の駅・たろう（宮古市）



高畑一里塚。盛岡の町を離れた山中に残る

大慈清水。街道の起点に近い盛岡市鉾屋町にある

### 鞭牛和尚が開削した五十集街道

宮古街道は国道106号とほぼ並行し、北上山地を横断する、盛岡領内屈指の難路だった。盛岡を出た街道は一挙に標高751mの区界峠まで駆け上がり、そこから宮古まで、屈曲して流れる閉伊川沿いを下っていた。終点は三陸浜街道との合流点で、盛岡城下と宮古代官所を結んでいたことになる。宮古の五十集（塩干魚などの海産物）、北上山地の木材などを運ぶ重要な街道だったが、渓谷を通る箇所が多く、崖が連続する難所が続いた。その道改良に半生をささげたのが、牧庵鞭牛和尚である。